

【実践事例①】

《第五学年》

領域C「読むこと」

「物語の全体像を捉えて読むために」

一 学習材

『桜の花の下で』（令和三年度 学力診断問題文）

二 ねらい

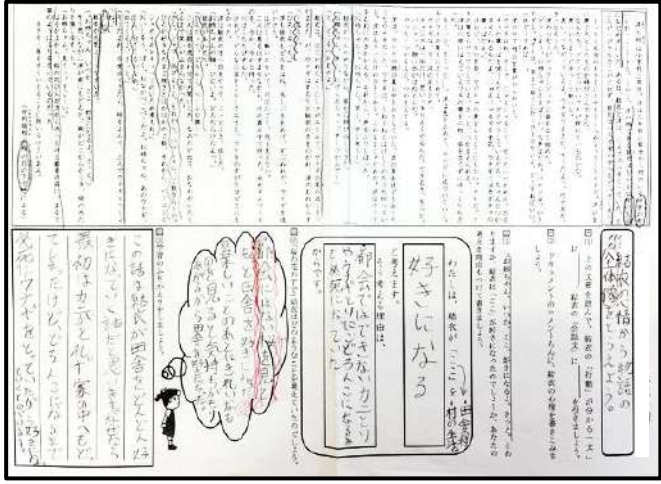
叙述を基に、物語の全体像を捉えて読むことができる。

三 活動の流れ（全三時間）

第一次 物語の内容を理解する。（一時間）

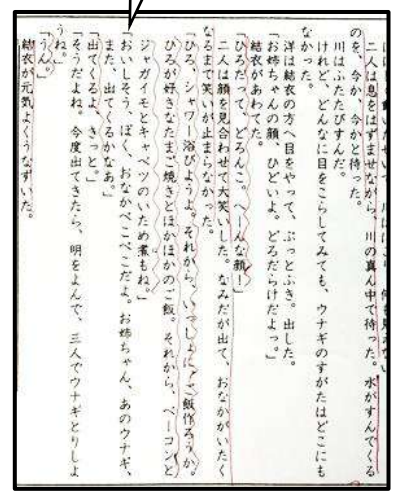
①結衣の会話文と行動が分かる一文に線を引き、そのときの気持ちを考える。

素材文「桜の花の下で」は、村の生活になじめない結衣の心情の移り変わりを捉えることで、物語の全体像に迫ることができる。そこで、「文章の全体像を捉える」というめあてを初めに示し、そのために、結衣の心情を詳しく読み取っていくという活動の流れを明確にした。また、ワークシートは学習の繋がりを見通しやすいように、めあてから振り返りまで、一枚で完結できるようにした。



次に、結衣の会話文や行動が分かる一文に線を引き、心情を丁寧に読み取らせた。ここでは、「一文」の意味を児童に意識させながら線を引かせた。

結衣の会話文には波線を、行動が分かる文には傍線を引いている。



②考えを交流し、物語の内容の理解を深める。

Google ドキュメントを用いて、結衣の行動や会話から分かるその時の心情を共同編集で書き込んでいった。さらに、意見を交流させることで、より自分の考えを深められるようにした。タブレット端末を使うことで、スムーズにその後の意見交流、共有が可能になった。また、普段発言することが苦手な児童であっても、端末上では積極的に考えを書き込むことができた。多様な意見を出し合うことで、各々の考えがより深まっている様子だった。

物語後半の、結衣の心情の変化が表れている一文については、ペアで意見を交流しながら、結衣の心情をコメント欄に書き込んでいった。

洋も結衣もどろをほね、水しぶきをあげ、ずぶぬれで、ウナギを追いかけた。
 ひろはくっついていて、川はにぎり、何も見えない。
 二人は息をはずませながら、川の真ん中で待った。水がすんでくるのを、今か、今かと待った。
 川はふたたびすんだ。
 けれど、どんなに目をこらしてみても、ウナギのすがたはどこにもなかった。
 洋は結衣の方へ目をやって、ぶっとぶき、出した。
 「お姉ちゃん、ひどいよ。どろだらけだよ。」

結衣があわてた。
 「ひろだって、どろんこ。へーんな顔！」
 二人は顔を見合せて大笑いした。なみだが出て、おなかがいたくな結衣があわてたるまで笑いが止まらなかった。
 ひろ、シャワー浴びようよ。それから、いっしょに、ご飯作ろうか、ひろが好きなたまご焼きとほかほかのご飯、それから、ペーコンとジャガイモとキャベツのいため煮(に)もね。
 「おいしそう、ほく、おなかぺこぺこだよ、お姉ちゃん、あのウナギ、また、出てくるかなあ。」
 「出てくるよ、きっと。」
 「そうだよ。今度出てきたら、明をよんで、三人でウナギとりしよう。」

うん。
 「お姉ちゃん、いつか、ここ、好きになるよ、きっと。」

全体で意見集約をする場合は、この画面を直接教室の大きなスクリーンに映し出し、考えを共有した。

田舎楽しいかも！
 田舎もすくなくはじめそうだな！！
 田舎でも楽しいな！
 田舎、嫌いじゃないかも...
 楽しい思い出ができてよかった
 田舎でも楽しい！ 好きかも...

いつ来るんだろう？
 ウナギとワクワクが止まらない
 いつ来る！？(ワクワク)
 はやく水がすんでほしい。(ワクワク、ドキドキ)
 はよ来い！！
 ドキドキとワクワクが止まらない、いつ来るの？(呆顔)
 早く出てこないかな...



あらゆる場面で、交流活動を取り入れた。考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりすることで、さらに自分の考えを深めることができていた様子だった。



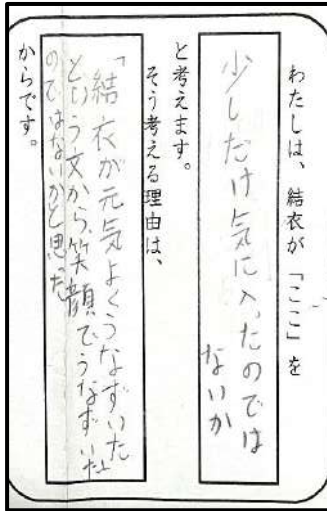
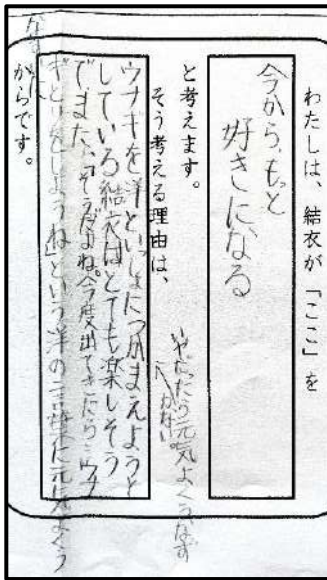
結衣の心情の変化をGoogle Jamboardを用いて付箋を動かしている様子。教室のスクリーンに映し出し、全体共有を行った。その後、なぜこの位置に付箋を置いたのか、意見を交流し合った。



第二次 物語を読み味わう。(二時間)

①洋の言葉から、結衣が田舎の生活を好きになったのか、考えを交流する。

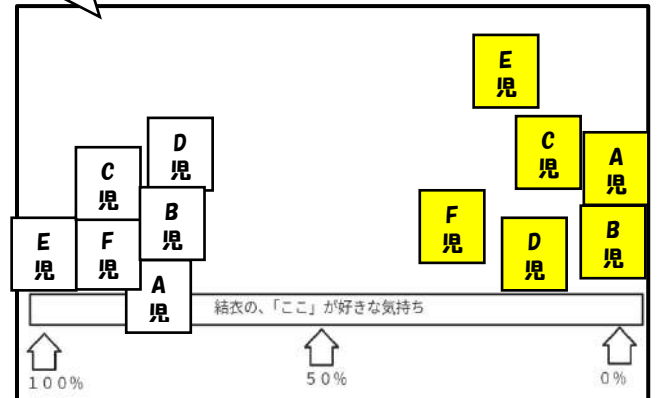
第二次では、洋の「お姉ちゃん、いつか、ここ、好きになるよ。きっと。」という一文に着目させ、結衣の、村の生活に対する気持ちについて考えさせた。ここでは話型を用いることで、書くことが苦手な児童も意欲的に学習に取り組むことができていた。



②桜の花の下で、結衣はどのようなことを思っていたのか、考えを交流する。

最後に、桜の花の下で結衣が考えていることを想像し、Google Jamboardを用いて結衣の心情が変化している根拠を交流させることで、物語の全体像を捉えさせた。

心情を想像することが苦手な児童であっても、Google Jamboardの付箋で気持ちを可視化することで、考えをより共有しやすくなり、意欲的に考えを伝えることができた。



物語の最後

桜の花の下での結衣の気持ち

物語の最初

ウナギをとる前の結衣の気持ち

【学習を終えた児童の感想】

- ・私は、結衣の一つ一つの行動や会話文を読みとることが大切だと思いました。そうすることで、結衣の心情や次の行動を想像できるからです。
- ・この話は、結衣の心情がどのように変化しているのかしつかりと書かれていないけど、想像できるところがおもしろいと感じました。
- ・結衣が元気よくうなずいたところが結衣の気持ちがよく表れていて、いいなと思いました。

四 総括

物語を読む際に、叙述に基づいた登場人物の行動や心情を読み取ることは、おむねできている。しかし多くの児童は登場人物の心情の変化を場面ごとに捉えながら、物語の全体像を具体的に想像することができていない。

今回の実践では、物語の全体像を捉えるために、まず登場人物の行動と会話を丁寧に読み取ることから始めた。そして、叙述から分かる人物の心情を想像し、考えたことをペアやグループで交流する活動を取り入れた。他の児童の意見を聞くことで、より自分の考えを深められている様子だった。また、タブレット端末を効果的に活用し、人物の行動や会話からその時の心情を共同編集で書き込んでいたり、心情の移り変わりを可視化したりすることで、その後の対話や全体での意見交流を活発に行うことができた。登場人物の行動や会話だけでなく、その時の気持ちを捉えることが、文章全体を読み取るヒントになると気付けた児童もいた。実践を通して、登場人物の心情とその移り変わりを叙述から豊かに想像し、意見を交流することで、物語の全体像を捉える力を身に付けさせることができたと考ええる。

今後の課題は、対話的な交流活動と、タブレット端末を用いた活動とのバランスである。今回の実践では、児童は端末を使うことで、主体的に意見を書き込めていたものの、キーボードで文字を入力することに精一杯で、深く思考しながら意見を書けていないことがあった。今後は、意見をタブレットで発信した後、それらの意見を基に、児童が直接対話したり、対話した後にタブレット端末を用いて意見を全体共有したりするなど、タブレットをはじめとする ICT 機器のよさ

と、従来の交流活動のよさを組み合わせることで、より深い学びを達成できると考える。タブレット端末は主体的・対話的で深い学びを実践するための一つのツールとして位置付けることが大切であると感じた。

今後は、児童の読む力をさらに育むために、想像した人物像や全体像と関わらせながら、様々な表現が読み手に与える効果について自分なりに考えたり、それらを交流したりする活動をタブレット端末も効果的に取り入れながら実践していきたい。

学習のめあて

① 上の文章を読んで、結衣の「行動」が分かる一文に、結衣の「会話文」に を引きましよう。

② ドキュメントのコメントらんに、結衣の心情を書きこみましよう。

① ①お姉ちゃん、いつか、ここ、好きになるよ。きっと。とありますが、結衣は「ここ」が好きになったのでしょうか。あなたの考えを理由もつけて書きましよう。

わたしは、結衣が「ここ」を

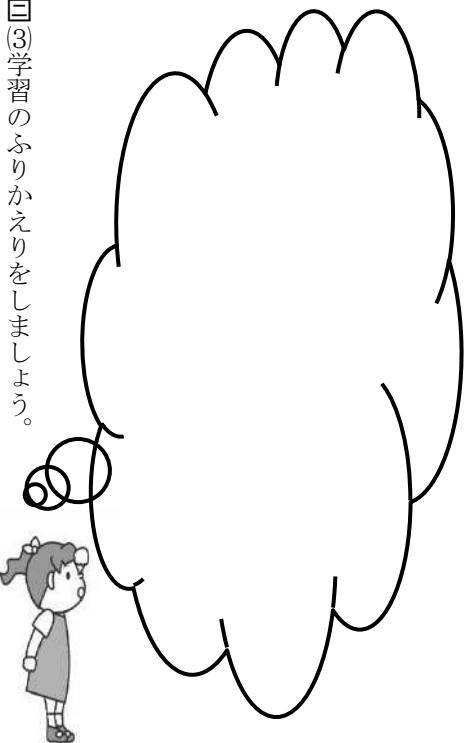
と考えます。

そう考える理由は、

からです。

②「桜の花の下で」結衣はどのようなことを考えていたのでしょうか。

③学習のふりかえりをましよう。



洋と明は小学校三年生。洋は三年前に都会から明のいる田舎の村へと引っこしてきた。しかし、洋の姉である結衣はなかなか村の生活になじめずにいた。ある日、結衣と洋は、二人でカニをとっていた。ところが一びきもカニがとれず、結衣は一人で家の中へもどってしまった。

さっきと反対のすきまにエサをさし入れようとしたときだ。洋の目に黒ぐろとしたものが飛びこんできた。

なんだろ、フナ？でっかいフナが群れているのかな。黒いかたまりがゆっくり動いた。

長い。つながつているよ。ウナギ？まさか。そうだよ。ウナギだ、きっとそうだ。

洋の心ぞうがドクンドクン音を立て始めた。どうしよう。お姉ちゃんをよぼうか。大声はだめ。バケツは、小さすぎる。＊タモは、家まで取りに行くひまはないよ。どうすればいい、一体どうすれば……。

洋の中で明の言葉がひらめいた。

「ウナギはね、手じゃ、にゆるにゆるして、ぜったいつかめん。カボチャの葉っぱを使うんだよ。ザラザラしているだろ、ちゃんとかまえられるんだよ。にゆるにゆるでも平気。ウナギにはカボチャの葉っぱだよ。」

けれど、今の季節、カボチャの葉なんてどこにもない。フキだ。フキの葉ならザラザラしている。きっと、つかまえられる。

洋は川岸にはえているフキの葉を二枚、音を立てずにゆっくりちぎった。

そうっと、そうっと……。洋は息を止めて、ウナギに近づいていく。手にフキの葉をにぎりしめて。

ウナギは、今、洋の足もとだ。チャンスは一回だけ。思いっきりよくやるんだ。できるさ、きっと。バシヤッ。顔に水がはねとんだ。

やった！つかまえた。つかまえてる。

洋は、ウナギの胸の真ん中をおさえていた。洋の身長ほどもありそうなウナギだった。ウナギは、くねくねとはげしくのたうち回っている。洋はありったけの力をこめる。このままじゃだめだ。洋はウナギをむねにだきかかえる。それから、声をふりしぼった。

「お姉ちゃんっ。お姉ちゃん、早く、早く来て！」

結衣がつんのめりながら、家から飛び出してきた。

「お姉ちゃん、早く、にげられちゃう。早くつかんで！」

「ど、どこをつかむのよ。」

結衣は、はじめたようにしゃがみこんで、ウナギの尾の近くをつかまえた。が、ウナギはするりと結衣の手のがれ、洋のおねからすりり落ちた。

「ひろ！そっち。」

洋も結衣もどろをはね、水しぶきをあげ、ずぶぬれで、ウナギを追いかけた。

はげしく動いたせいで、川はにごり、何も見えない。二人は息をはずませながら、川の真ん中で待った。水がすんでくるのを、今か、今かと待った。

川はふたたびすんだ。けれど、どんなに目をこらしてみても、ウナギのすがたはどこにもなかった。

洋は結衣の方へ目をやって、ぶっとふき。出した。

「お姉ちゃんの顔、ひどいよ。どろだらけだよ。」

結衣があわてた。

「ひろだつて、どろんこ。へーんな顔！」

二人は顔を見合わせて大笑いした。なみだが出て、おなががいたくなるまで笑いが止まらなかった。

「ひろ、シャワー浴びようよ。それから、いっしょに、ご飯作るうか。ひろが好きなたまご焼きとほかほかのご飯。それから、ペーコンとジャガイモとキャベツのいため煮もね。」

「おいしそう、ぼく、おなかべこべこだよ。お姉ちゃん、あのウナギ、また、出てくるかなあ。」

「出てくるよ、きっと。」

「そうだね。今度出てきたら、明をよんで、三人でウナギとりしようね。」

「うん。」

結衣が元氣よくうなずいた。

①お姉ちゃん、いつか、ここ、好きになるよ。きっと。そう思いながら洋が家にもどると、風がどこからかふき、庭の木たちを強くゆすった。

「お姉ちゃん、見てっ、すごい。」

はるか上から、桜の花びらが次から次へと洋と結衣の庭に、まるで雪のようにふりそそいでいるのだった。

＊タモ：魚をすくいとることに用いる小さいあみ。

(中村瑞枝『桜の花の下で』による)